

春の日

小川未明

青空文庫

もう、春はるです。仲なかのいい三人にんは、いつしよに遊あそんでいました。

徳とくちゃんは、なかなかのひょうきんもので、両りょうほう方ほうの親おや指ゆびを口くちの中なかに入れ、二本ほんのくすり指ゆびで、あかんべいをして、ひよつとこの面めんをしたり、はんにやの似顔にがおをして見みせて、よく人ひとを笑わらわせました。とし子こさんは、おこりんぼでちよつとしたことでも、すぐにいぼをつつてしまいます。そうすると武たけちゃんと、徳とくちゃんは、つまらなくならず。二人ふたりが、いろいろに機嫌きげんをとつても、とし子こさんは、笑わらいもしなければ、ものもいけません。

そんなときです、徳とくちゃんは、いつもする得意とくいの、指ゆびを口くちに入れて、あかんべいをして、とし子こさんの顔かおをのぞきます。さすがに、いぼつりのとし子こさんも、これを見みると、くすくすと笑わらい出だして、じきに機嫌きげんを直なおすのが例れいでありました。

武たけちゃんには、徳とくちゃんのように、そんなひょうきんのまねはできませんでしたから、もし、とし子こさんと二人ふたりのときに、どうかして、とし子こさんが、いぼをつれば、

「とし子こさんのばかやい。」といつて、悪わる口くちをいうか、なぐりつけるのが関せきの山やまで、とし子こさんも、

「だれが遊あそぶもんか。」と、いって、泣なきながら、帰かえつてしまいます。

しかし、三人は、いつとはなしに仲は直りますが、もし、徳ちゃんがいなかったら、その容易に打ち解ける糸口が見つからなかったかもしれない。

ある日のことでした。三人は、いつしよに、お濠の方へ歩いてゆきました。雪が消えて、水がなみなみと、午後の日の光に輝いていました。土橋のところへは、よく、あめ屋や、おもちゃ店が出ています。

この日は、珍しく、紙芝居のおじいさんがきていました。

「紙芝居だね。」

「おもしろいな。」

そんなことをいい合つて、おじいさんの方へ走つてゆきました。

* * * * *

おじいさんは、五、六人の子供を前に集めて、お話をしていました。

——王さまは、戦争からお帰りがなされると、その美しいお后をおもらいになりました。

三国一の美人ですけれど、まだお笑いになつたことがあります。どうしたら、愛するお后が笑ってくれるだろうか？ 王さまは、山と宝物をお后の前に積まれました。けれど、やはりお笑いにはなりませんでした。

御殿のお庭に、鐘がつるされていました。

「この鐘を、なんになさるのでございますか。」と、お后が、王さまにお問になりました。

「この鐘は、私が、忠勇の兵士をここへ呼び集めるときに、鳴らす鐘だ。これを鳴らせば、たちどころに、城下に住む三万の兵士たちは、ここへ集まってくるのじゃ。」

「どうか、この鐘を鳴らしてみせてはくさいませんか。」

「ばかなことをいうものでない。ほかの願いならんなりときいてやるが、この鐘は大事があつたときのほかは、鳴らされないのだ。」

「これほど、お願いしても、おききくださらなければ……。」

王さまは、愛するお后の機嫌を損じたと思し召されて、家来に命じて、鐘をお鳴らしになりました。

すると、「すわ、大事だ！」と、いつて、三万の兵士は、取るものもとりあえず、軍の仕度をして、御殿のまわりに集まりました。

これをごろんになった、お后は、はじめて、からからとお笑いなさいました。

何事もなかつたとわかると、兵士たちは、そのまま帰ってしまいました。

お后は、鐘を鳴らしただけで、あの先を争って集まった兵士たちのようすを、もう一度見たいと思われました。

「もう一度あの鐘を鳴らしてみせてください。」

王さまは、美しいお后の笑いをごらんになりたいばかりに、また鐘をお鳴らしなさいました。鐘の音をきくと、兵士たちは、取るものもとりにあえず、軍の装束に身を堅めて、前と同じように、御殿のまわりに集まってまいりました。これをごらんになったお后は、おもしろがつて、からからと、ころげるばかりに、お笑いなさいました。

それから、幾月も間がなかつたのであります。やぐらに登って見張りをしていた家来が、あわてて降りてきて、

「たいへんです、夷の軍勢が、押し寄せてまいりました。」と、王さまに、お告げしました。

王さまは、お驚きなされて、さつそく、鐘をお鳴らせになりました。しかし、二度も、だまされた人たちは、またかといつて、だれもくるものがありませんでした。それがために王さまとお后は、ついに夷の軍勢のために、浮虜となつてしまいました。――

おじいさんのお話は、終わりました。

三郎は、肩をならべて、お家の方へ帰りました。
* * * *

「昔、支那にあつた、ほんどうの話だつてね。」と、武ちゃんが、いいました。

「ばかな、王さまだなあ。」と、徳ちゃんが、考え深そうに、いまの話をおもひ出しながら

いいました。

「私、あんな后きらいよ。」と、とし子さんが、恥ずかしそうにいいました。

あちらには、春の黄昏方の空が、うす紅く、美しい、夢のように見られたのでありま

す。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「教育・国語教育」

1936（昭和11）年3月

※表題は底本では、「春《はる》の日《ひ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春の日

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>